
春だから

山波太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春だから

【Nコード】

N0660T

【作者名】

山波太郎

【あらすじ】

春だから。言い訳としてはこれで十分だろうか。変態と知り合っ
た。（冒頭より）

春だから。言い訳としてはこれで十分だろうか。変態と知り合っ
た。

風の強い日だった。だれかの洗濯物が飛んでいる姿は見なかった
けれど、ベランダに放置していたハンガーたちは互いにぶつかり合
って、きわめて安っぽい音楽を奏でていた。全く以てうるさかった。
耳障りだった。そう思ったけれど、今まで放置してあったのにうる
さいからと片付けるのは身勝手なようで、やはり放置した。すると
ハンガーたちは調子にのってけたたましさを助長するのだった。二、
三個がくるくると回転したときは、ここはサーカスじゃないんだよ、
なんてことを思った。

そんな音があまりにも気に障るので、私は家を飛び出した。自転
車に乗って湖に行こうと考えた。ハンガーがうるさいから。私の休
日を邪魔するから。それでも、だからって湖に行こうなんてきつと
論理思考的におかしいということは分かる。もし誰かに説明するに
は、もう五、六個くらい段階を踏まえなさいけないのだとも思う。
でもこれが事実なのだ。そういう意味で私もきつと、知らないうち
に春の風に当てられていたのだろう。

私が目指した湖まで、ママチャリで四時間かかった。出発が午前
の十時だったから、今は午後二時ちょうどだ。私は左腕に着けたア
ナログ時計を確認した。本当、どうしてうるさいからって湖に行こ
うと思ったのか、誰かに説明してほしかった。帰りのことを思うと
若干暗くなったが、お昼休憩を三十分挟んだのを思い出して、帰り
はその分早く着けると思うと気が晴れた。それでも今すぐ帰りとい
うのはさすがに味気ない気がして、だから湖のほとりを歩いてから
帰ろう、そんなことを思った。

歩き出して十五分たった。時計でそれを確認すると、引き返すこ
とにした。湖をぐるりと回る一本道を歩いていたら、ここで引き

返して戻ればきつちり三十分散歩したことになる。

それでもその考えには従わなかった。反抗期というわけではない。気になる音がしたからだ。前方から、何か乾いたものを引きずってくるような音が近づいてきたのだ。地面はコンクリートだから、石の音は当然ながら混じっていない。ズーウズーウと人の足に合わせるように、その音は響いてきた。やはり人なのだろうとは思った。でも姿は見えなかった。理由は、道が入り組んでいて、さらに植物が垣のようになっていたため、視界がひどく悪かったからだ。

特別気になったわけではない。木でも引きずっているのだろうということは簡単に想像できた。でも動機が分からない。そんな人に背を向けて歩くのは注意が足りてないのではないかと、そんなことを考えてしまったためにその人物を目で確認しなくてはいけなくなったのだ。だから私はそのまま歩くことにした。

結果として私は後悔することになった。十秒ほどでその人に出くわした。そこまでは予定通りだ。小太りした中年のおじさんだった。頭は少し禿げていた。引きずっていたのはやはり木で、水と砂に削られて角がとれた白木だった。ただ、その出で立ちには全裸だった。正確には革靴と黒い靴下は履いていたから、私の証言は誇張なのかもしれない。でも全裸にしか見えなかった。

もちろん私は驚いた。男性の陰部なんてしつかりと見たことなんてなかったから、どうしてもそこに目が入った。手で目を覆ったって見えるものは見えるのだ。ただ、どれほどの大きさでどんな形をしていたか、なんてことを細かにするのはやめておく。出来ればノーカウントしておきたいのだ。本当は逃げたかったのだけれど、腰と足が伸び上がってしまったって走れなくなった。普通は腰が抜けたりするのだろうが、その前に跳び上がってしまったって、そこから戻らなくなった。体を反転することもできないし、顔をそらすこともできなかったから、とにかく私は陰部を見るはめになった。

せめて声くらいは出そう。少し間を置いて、私は考えたばかりの、こういふとき女子が取るべき反応のテンプレートを実行に移そうと

思った。

でもおじさんの方が先に、

「違うんだ！」

と目を真っ赤にして言うものだから、

「何が違うの？」

と聞き返してしまった。一応声を出すことではあるけれど、テンプレートとは違う気がした。

「僕は変態じゃない」

「じゃあ何なの」

「ただ近所の子どもがうるさかったただけなんだ」

話が噛み合わないから私は黙った。

「落ち着いてくれ、頼むから落ち着いて……」

それを言うおじさんの方が落ち着いていなかった。状況の整理は互いに必要らしかった。おじさんは私を見ずに空中を見て、自分に話すようにその言葉を繰り返した。何かを伝えようとしているのは分かったので、少しだけ私は冷静になれた。

「これは、すぐそこで拾った」

おじさんは持っていた白木を示した。私は頷いたけれど、それはもうどうでもよかった。

「歩いていたら目に止まって、だから拾って歩いてたんだ」

目で覆っていたって見えてしまうものだから、私は手をかざしてそこだけを目に見せないようにした。おじさんは木の説明をするばかりで、なぜか陰部を隠そうとしなかったのだ。それはかわいいほどに縮こまっていて……。やめておく。

「それで……あの、どうして……」

全裸なのか、ということを読み取ったが、口をついて出せなかった。察してくれ、と切に願った。そしてそれは伝わったようで、おじさんは身体を屈めてからそのことに触れた。

「違うんだ！ これは、その……子供たちがうるさいから……！」

全裸。

先ほども聞いたが、二回聞いたって分からない。でも突っ込んではいけない気がした。その論理に足を踏み入れてはいけない。理解に努めてはいけない。そんな警告がなされた。

だから、

「へえ……。大変ですね」

と実に適当なことを言っつて、踵を返すことにした。今このやり取りは、なかった。私は何も見ていない。そんな台詞で自己暗示に埋めようとした。

「違っつて言っつてるだろ！」

なかったことにしてあげたいのに、おじさんはそうさせてくれなかった。立ち去ろうとする私の背中にそんな言葉を浴びせた。

「信じろよ！」

真っ赤になっつておじさんは怒っつていた。

「信じてますよ」

「目が信じてないんだよ！」

それは、認める。

「僕はこれでもすごいんだ」

そう言っつて、だれでも知っつている電機メーカーの名前をあげた。

しかし、これでもと指っつている姿が愛嬌にもならない。

「僕はそこで課長なんだ」

「それは……それは……」

「本当なんだっつて！」

私は信じてあげたかつた。いや、むしろもう信じていた。けれど、それに関わらずおじさんが突っつかつてくるのは、きつと信じてもらえていないと、おじさん自身が思っつたからだ。今日、この出会いの形は何かの間違い、または嘘で、普段はすごいのだ。それをどうしても信じさせたと確信したいのだ。私だっつてそれを願っつた。

おじさんはしばらく唸ると、携帯電話をだせと言っつた。

「何に使っつつの？」

私が訊くと、メールアドレスを教えると言っつた。

「それで、どうするの?」

「君を会社に招待する」

そうすれば、私がおじさんのことを信じるだろうというのだ。そんなことをしなくても信じると言っても引き下がってくれない。

第一、と私は言った。

「携帯、家に忘れました」

「ふざけるな!」

いきり立つおじさんに私は素直に謝った。謝ることが素直なのかということではなく、早く去りたい欲望に素直だったということだ。

「しょうがないから、書くから覚える」

おじさんは、地面に石で字を書いた。それは英字のようで、もちろんおじさんのメールアドレスだと思われた。初めは持っていた白木で書こうとしたのだが、アスファルトに跡は残らず、乾いた音を立てて折れてしまった。おじさんは舌打ちをすると、小石で以てそれを書いた。白い字が見にくいながらも残った。

「ぜったいにメールしろよ」

おじさんはそう言い残して、堂々と帰っていった。まるで部下を叱る上司のようだった、とその後ろ姿を見ながら思った。

家に帰った時刻は夜の八時を過ぎていた。かなり疲れていて、腹も空いているというのに、ベッドに横になった。すぐに眠りたかった。枕のよこに置いてあった携帯電話が目についた。メールについて、当初送らないつもりだった。教えられたとしても、所詮覚えるのは頭である。どうせ忘れるだろう、忘れるに違いない。自分への正当化はそれに尽きた。しかしその思惑は家に帰って完全に外れた。ばっちり覚えてしまったのだ。理由は、復唱十回、暗唱十回それとテスト有りの徹底ぶりだった所為だろう。

私は観念して、眠たい目を擦りながら、教えられたメールアドレスを携帯電話に打ち込んだ。そして文面も適当に、送信ボタンを押した。

あとは返信を待つばかり。

普段ならば、こんなことはしないだろう。アドレスなんて覚えていたって関係ない。
それでも、春だから。言い訳としてはこれで十分だろうか。

(後書き)

気付いたら春終わってた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0660t/>

春だから

2011年5月7日00時26分発行